

---

# とある黒子の空間移動

ミイティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある黒子の空間移動

### 【Nコード】

N0926M

### 【作者名】

ミイティ

### 【あらすじ】

ちよつと前にとある黒子の空間移動を書いてたんですが、書き直すことにしました。

よろしくお願いします！

## 風紀委員

科学と魔術が交差するとき、歯車は動き出す……

科学が発展し、能力者と呼ばれる超常現象を引き起こすものたちがいた。そのものたちが住んでいたのは『学園都市』。今日もいつものように道を誤ったものがあらわれ、それを正すものがいた。その名は『<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員』

携帯の7時設定の目覚ましで常盤台中学学生寮の208号室の布団から出てきたのは、常盤台中学1年生、第177支部所属の「<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員」であった。

ベッドからおり、出口付近にある洗面所へいき顔を洗った。そして歯を磨き、髪を結んでいた。

「ふあ〜」

鈴のような欠伸をして、茶髪のツインテールを揺らしてベッドの方へ戻るのは、白井黒子であった。

制服を着終わると同時に、

”常盤台中学学生寮に住まいの方は食堂までいらしてください”と点呼がかかったのだ。

「もう7時半ですね」

常盤台中学学生寮には、午前七時に起床し、午前七時半になったら食堂へいくというルールがあるのだ。

黒子がドアをあけると、常盤台中学の灰色のプリーツスカートに半袖のブラウス、袖無しのサマーセーターの制服をきた学生が次々と食堂へ向かっていた。

黒子もその中へまじり、食堂へ歩いていった。

食事を終えた黒子は再び208号室に戻り、手提げのカバンをもち、鉄矢を足に巻いて208号室をでた。

黒子は階段を下りて自動ドアをくぐり、少し右に曲がり横断歩道の

ところで止まった。

前を通る車がなくなると同時にデザインが変わっている信号機からメロディが流れ、男の人が歩いているアイコンがあった。

黒子は横断歩道を渡りいつものように学校に向かっていた。

途中にクレープ屋があり、チラシが配られていた。

「新しく開店しました。よろしく願いします。今ならもれなく、ゲコ太人形つき！」

と、チラシを配る人が呼びかけていた。

通学路だから仕方なく黒子はチラシをもらい、手提げカバンに入れているときだった。

突如クレープ屋からみて左斜め前にある『いそべ銀行』が、何者かによって爆発されたのである。

防犯用シャッターは爆発と同時に前方にあつた木にあたり、動きを止めた。

「いそげ！」

そう言つて爆風の中から出てきたのは口元にスカーフを巻いた3人の男達だった。

## 銀行強盗

銀行からでてきた男達はお金と思われる物を担いで逃げていた。

「強盗……！」

黒子は男達の目の前に空間移動テレポートを使って転移し、男達の道を塞いだ。

黒子はカバンの中から腕章のようなものを取り出し、

「風紀委員ですの。器物破損及び窃盗の現行犯で拘束します！」  
ジャッジメント

男達に腕章を見せつけこういった。腕章には盾のようなマークが描かれていた。

「どきやがれ！」

そう言つてリーダー各であろう男は地面に手をつけ上に引き上げると、手には黒いものが巻きついていった。

男は思いつきりこちら目掛けて投げてきた。

黒子は空間移動テレポートで黒い物体をよけた。

男は再び地面に手をついた。その手からは一瞬電撃のようなものがみえ、電撃に呼応するかのように黒子目掛けて研ぎ澄まされた黒い物体が伸びた。

黒子は空間移動テレポートで黒い物体をまたもや避けた。

『電撃…黒い物体…地面……』

黒子が何の能力か考えている間に男は地面につけていた手に再び電撃を流すと同時に思いつきり手を引きあげた。

黒い物体は男の掌を中心に収縮していき、刀のような形を象った。

「砂鉄ですわね！」

男は砂鉄の刀を持って黒子に向かって走り出した。

黒子は体術には自身があつたので、その場からは足を動かさず相手を観察していた。

男は砂鉄の刀が届く範囲になると、思いつきり刀を上から下へと振った。黒子はそれを空間移動テレポートでよけ、相手が刀を構える前に男の頭上に転移し、ドロップキックを見舞った。

ドロップキックで倒れたその隙を見逃さず黒子は相手の目の前に転移し、足に巻いてきた鉄矢を撫でるような動作で男の体に触れていない部分の服に転移させ、瞬く間に男を地面に貼り付けにした。

「それ以上抵抗なさいますと、今度はこれを体内に直接空間移動させますわよ？」

鉄矢を人差し指と中指の間に挟み、男を脅した。

「畜生……」

男はそう言っていたが、口元には笑みがあつた。

笑みに気づいたとたん、黒子の足元からは砂鉄が表れ、黒子の足は拘束された。

「なっ……っ！」

## キャラクター紹介？（前書き）

これから黒子の戦闘シーンがあるので、黒子の能力などについて書いておきます。

## キャラクター紹介？

常盤台中学1年生。第177支部所属の風紀委員。シャッジメント

茶髪ツインテールの少女。鈴のような声をしており、語尾に「ですの」と付けるなどのお嬢様口調が特徴（ただし汚い言葉も平気で使う）。

小学5年生の時から「風紀委員」として活動しており、その能力によって活躍も多い。

好物はスイーツ系。そのためか最近体重が増えてきたのが悩みでダイエットも検討している。

一人称「わたくし」・語尾に「ですの」を付ける、ステレオタイプなお嬢様言葉。

足に鉄矢を巻きつけていて、鉄矢の数は40本

1つめの能力はLV5『レポート空間移動』

白井の空間移動の場合は、対象に触れていなくても転移させることができる。そして一度に複数のものを転移させることができ、

最大転移質量4250kgで最大転移距離は2650km。自身を転移させる際の直線での移動速度は約288km/h。

このことから自身の連続転移では、一度レポートしてから再度行うまでに1秒ほどのラグがあると思われる。

因みにこの時、ヒュン、ヒュン、という小刻みに空を裂く音が響くようだ。

戦闘では、相手を逆さまに転移させて転ばせる、自身を相手の頭上へ転移してドロップキックを見舞うなどの攻撃をし、武器として太股に忍ばせた鉄矢を転移させて、相手の衣服を壁などにダーツのように刺し止める戦法を使う。

相手に刺し込むことも可能だが、立場上、相手を必要以上に傷つけないように制限している。



基本的に転移先の物体に割り込んで転移するので、道端の石ころでさえ人を殺すことが可能な凶器となり、道具がなくても人間の一部分のみを転移させてしまえば、そのまま殺せてしまう。

空間移動という性質上軌道を見て避けることはできず、上記の理由から防御力も無視するため、物理攻撃手段としてもなかなか強力。ただし出現の瞬間にしか破壊力がないためピンポイントの攻撃しかできず、幻覚や超スピードなどで照準が狂うと無力化してしまう。転移の際体の向きを変更できるため、相手を瞬時に押し倒すなど格闘戦にも応用できる。

空間移動の最大攻撃は、「空間の歪み」と呼ばれるものを視界に展開し、任意の範囲内の物質を別空間へ転送する。空間の歪みの展開時、その範囲は名前のとおり目に見えるほどに空間が歪む。対象の体を物理的に引きちぎると言った強力な殺傷能力の他、発動した相手の攻撃を空間ごと別の場所に飛ばして不発させるなど高い応用性と効果を合わせ持つ術である。

## 形勢逆転（前書き）

【重要】今後の小説にかかわっていきます。

黒子の能力、空間移動テレポートと風力使用エアロシユターですが、

多重能力関係はなしにしようと思うのです。

しかし読者の希望も聞いてみたいのでアンケートを開きました。  
メッセージが何かで答えをお聞かせください。

1・風力使用エアロシユターと空間移動テレポート両方いる

2・空間移動テレポートだけでいい。

ちなみに私は2番にしようかなと思ってます。

誰もメッセージがこなければ自動的に空間移動テレポートだけになります。

## 形勢逆転

男は砂鉄を操り鉄矢を引き抜き、辺りに投げ捨て、手に地面をつき腰を上げた。

「形勢逆転だな」

と黒子を見ながら言つて、男は再び砂鉄で刀を構成した。

「じゃあな。空間移動能力者」  
テレポーター

男は黒子目掛けて上から下に刀を振つたが、その刀は黒子にはなく、さつき黒子に足にまわりつかせた砂鉄にあたつたのだ。

「何……！？」

「まったく……私の能力はあなたが口にしたとおり空間移動ですよ？ 拘束する技など意味がありませんわ」  
テレポート

男の後ろに転移していた黒子はこう言つて、男が振り向く寸前に黒子は足払いをし、男をこかした。

男がさつき投げ捨てた鉄矢を、空間移動で再び男の体に触れていない服の部分に鉄矢を打ち込んだ。  
テレポート

「形勢逆転ですわね」

別にさつきのようなことがおきても空間移動で逃げられるが、一応男からは距離をとっていた。

「てめえ！」

リーダー各の男の部下である2人の男は、リーダーを助けるべく黒子に背後から殴りかかった。

黒子は、2人の男に触れていない状態で2人を地面に空間移動させ、リーダー各の男と同じく地面に貼り付けた。  
テレポート

足についている鉄矢40本のうち3人を拘束するために30本を使い三人を貼り付け状態にした。（一人の拘束に使う鉄矢の量は10本ちょうど）

「まったく、無駄なことを……」

と、黒子がそういったとたん黒子の足元の地面が消えたのだ。

地面の隙間に落ちた黒子は、

「なんですの!？」

と言っていた。すると、穴に落ちた黒子目掛けて黒子が放ったと思われる鉄矢が振ってきたのだ。

黒子はなんとか演算が間に合い、空間移動で穴から脱出した。テレポート

そこには、地面に貼り付けにしてあった男達が立っていたのだ。

「なっ……………」

「不思議そうだな、答を教えてやろう。俺の能力は採掘悪戯グラウンドフライっていつてな、直径1・5m深さ2mの穴を地面に作ることができるんだ」

「そして鉄矢を抜いたのは俺の能力、砂鉄使用サンドマスターだ」

砂鉄使いは先ほどから黒子が戦っていたと思われる男の能力だった。そしてもう一つの能力は、白井の背後から襲ってきたうちの一人：

…今のところではもう一人の能力は分からない。

「そういうことでしたの。わざわざご回答ありがとうございますわ。でも、貴方たちが能力を晒したことによって貴方たちはここにひれ伏すことになりますわね!」

## Dollmaster (前書き)

いや、見事に一票も届きませんでした。  
すでに風力使いの戦闘場面を空間移動エアロシユーターを使った戦闘場面に変わって  
いるのでぜひ見てみてください

## Dollmaster

「ひれ伏すのはどっちかな？ さあて、演劇の始まりだな」

そう言つて能力が判明していない一人の男が服の内ポケットから巻物のようなものを取り出した。

巻物を広げ、男は巻物に手をつき、そのとたんに手を置いていた場所からは煙が現れた。

「なんですか？」

煙が晴れると、その疑問は解決した。そこにいたのは人と同じきらしい大きさの1つの人形だった。

「いけ！」

男が声を出すと、人形が意思をもっているかのように反応し黒子に向かつてきた。その人形の腕からは刃が飛び出ていたのである。

「人形……あの刃のように何が仕込まれてるか分かりませんわね」

「人形ごとひれ伏せてあげますわ！」

そう言つて黒子は鉄矢を入れているもののホックをはずし、鉄矢いを右手に持った。

そして右から左へと撫でていき、さきほど男達に放った鉄矢を鉄矢いれに転移させていた。

触れなくても転移できるのが黒子の空間移動だから。  
レポート

そして再び右から左へと撫でていった。

全ての鉄矢は人形に仕向けられており、人形の内部などにどんどん鉄が転移され、人形は蜂の巣のような状態になった。

地面にバラバラになった人形を見て、次に人形を操っている男をみてこう言つた。

「この程度ですか？ 面白くありませんわねえ……」

余裕の笑みを浮かべていた黒子だった。

「何がつまらないだつて！？」

## 人形遊び（前書き）

初めてメッセージを頂きました

応援メッセージとか能力の提案とかあればどんどん送ってください！

貴方の能力が採用されるかも！

（変なことかいてるひと意外は出すと思います）

## 人形遊び

蜂の巣状態にしたはずの人形がどんくつついていったのだ。

「なんですって！」

「さあ、俺の人形遊びの能力にひれ伏すがいい！」  
マリオネットコントローラー

そう言つて人形のあらゆる間接の部分が割れ、そこからクナイが放たれたが、黒子は左に移動してクナイを避けた。

黒子が今度は鉄矢いれをなでないで人形に仕向けた鉄矢を全て鉄矢いれに戻した。

黒子は鉄矢いれから鉄矢を一本だけ取り出し人形の足を固定しようと足に放つたが、演算ミスにより鉄矢は足の7ミリ程度左へずれてしまった。

「そんな！」

そのすきを見逃さず、人形は腕から刃を出したまま黒子に襲い掛かつてこようとしていた。

「何だと!?!」

マリオネットコントローラー

人形遊びの能力を持っている男は驚いていた。

黒子に人形が触れる直前に人形が消えたのだ。

「ふう……芝居は大変ですわね」

黒子は先ほど人形に仕向けた1本の鉄矢を鉄矢いれに戻し、鉄矢いれを右から左に撫でて鉄矢を男達のはるか上空の広範囲に転移させた。

「2つの雨を見せてあげますわ！」



## 雨

恐らく1つめの雨は鉄矢の雨で、もう一つの雨は血の雨だろう。

サンドマスター  
砂鉄使いが上へ手を伸ばして、自分達の上にドーム状に砂鉄の盾を作った。

グラウンドフライ  
そして採掘悪戯はもし砂鉄の盾が突破された場合のことを考え、二人をつれていつでも鉄矢の雨から避けれるよう走る準備をしていた。  
マリオネットコントローラー  
人形がない人形遊びは、ここまでくればもう戦闘外だ。

「勝ちですわね……」

黒子はこう一人でつぶやいていた。

黒子のことだ、何か策があるのだろう。

最初の鉄矢数本が砂鉄に触れる瞬間、黒子は相手の間合いに転移し、  
マリオネットコントローラーグラウンドフライ  
人形遊びと採掘悪戯に足払いをしてこかした。

サンドマスター  
砂鉄使いも最後に足払いでこかし、演算がとぎれ砂鉄の盾はなくなった。

このまま鉄矢が振ってくると男達の体外に傷を負わせてしまうので、上空にある全ての鉄矢を先ほど足につけて鉄矢いれに触れていない状態で転移させた。

「まったく……登校中というのにめんどろなことですわね。まあ私の能力があれば学校に一瞬でいけますけど……」

男達を見ながらため息まじりに言った。

「くっ！」

サンドマスター  
砂鉄使いが黒子に手を伸ばすと同時に男の周りから黒子目掛けて鋭利な砂鉄が放たれた。

「ぐあっ！」

「まったく、おとなしくしていればいいのに……」

サンドマスター  
黒子は男の砂鉄が当たる前に砂鉄使いの後ろに空間移動し、男の腕をにぎって腕を背後にやり、関節技を決めたのだ。  
レポート

痛ててと幾度とわめく男はすでにみておらず、細長い携帯電話で

アンチスキル  
警備員に連絡を取っていた。

携帯を閉じると、男達にこう言った。

「おとなしくしていてくださいな。もう少しで警備員が参りますから」

そう言ってる間にアンチスキル警備員がきた。

恐らく支部がこの周辺にあったのだろう。

「あなたの能力、中々応用が利くですね。その便利さを生かし、曲がった道ではなくきれいな道を歩んでくださいまし」

アンチスキル  
警備員に連行されている砂鉄使いにこう言った。

男は反省したような顔をして車に乗り込んでいった。

「あ！ もうこんな時間でしたのね、まずいですわ！」

黒子は小型端末機のような携帯から薄いビジョンを引っ張り出し、右上にある時計をみて、学校に向かって空間移動していった。

## 常盤台

「シュレーディンガーの猫で有名な量子力学を超能力が発現する理論としており、能力者は『自分だけの現実』パーソナルリアリティを観測することで可能性としては存在する本来はありえない現象を実現させる。また、これには基本的に演算能力が不可欠であり」

1年生のある教室で超能力を発動するための超初歩問題を行っていた。常盤台中学だからLV3以上いるため、こんな授業を行わなくてもよいのだがあくまで復習をしているのだ。

チャイムがなると先生は礼をして教室からでていき、みんなは帰りの仕度を始めた。

「ねえ黒子、今日珍しく遅刻したようだけどどうしたの？」

黒子の前の席の子が後ろを向いて黒子に話しかけてきた。

「登校途中に銀行強盗にあいまして……少々拘束するのに手間取っただけですわ」

黒子は数学の教科書を手提げに入れながら質問に答えた。

「あ、風紀委員のお仕事だったんだ。だから先生あんまり怒らなかつたんだね」

「そうです。あのブルドック（先生の事）が遅刻で怒らない訳ありませんわ」

ブルドックとは社会で地理を教えている先生のこと、能力の授業の前に社会があつたのだ。

「それにしても今日は4時限でよかったよね！ 黒子、一緒にどこか行か」

その時だった。黒子の友達の声を遮るように窓の割れる音がし、そちらをふりむくと怪物のようなものがいた。

「キヤー！」

「うわー！」

一斉にクラスに悲鳴が巻き上がり、みんなは怪物とは正反対の方向

に固まった。

左肩までかかった長い髪に体、カニのようなハサミ。雰囲気そのものが人間ではないと言っていた。

## 未確認生命物体

怪物はガラスを踏みながら降りてきた。後ろのガラスの破片が当たって倒れた生徒を見ながら。

「この周辺を守る風紀委員の任についている白井黒子と申しますの。ジャッジメント話の分かる相手とお見受けして、お願いがございます。失礼ながら、この周辺に無断で侵入、学校や人物への被害を与える生き物を拘束するのが私の務めです。こちらとしても穏便にすませたいので、できれば」

黒子がクライメイト達の前に出て怪物に向かって語りかけた。その途中で怪物は突如黒子にハサミをむけて襲い掛かってきたのだ。黒子は即座に対応し、しゃがんでハサミを避けたが、黒子は自分の後ろに生徒がいたことに気づき怪物の足に触れて外に空間移動させた。レポート

黒子も怪物を逃さないうちに怪物がいる外に空間移動した。レポート

「こんな怪物、見たことありませんわ……一体何が起きたというんですの!？」

怪物は再び黒子目掛けてハサミをむけ、その中心から黒いものが放たれると同時に銃声音が当たりに轟いた。レポート

空間移動で黒い物からさけた黒子はその威力に驚いていた。

後ろにあった校庭の地面に半径2 m程度の長さに0.5 m程度の穴が空いていたからだ。

「な……」

なんと、同じ格好をした怪物が黒子の周りを一瞬の間に囲んでいた。『どこから沸いたんですの?』

そんな考えをしている間に後ろの怪物が黒い弾を放った。黒子は空間移動によって黒い弾を放った怪物の頭上に空間移動し、レポート思いっきり足を振り下ろした。バランスを失った怪物は倒れて粉になり、風に吹かれて消えていった。

「やはり人間ではないんですのね。だったら最初から遠慮する必要はなかったですね」

## 魔術師

そう言うとき黒子は左足に螺旋状に巻いてある鉄矢入れのホックを外し、右手に持ち、左手で右から左へと撫でる動作でどんどん転移させていった。

転移された鉄矢はどこにいったのか。全ての怪物が突然粉になり風に吹かれていった。

怪物がいたところには鉄矢があり、黒子が怪物の体内に直接空間移動させたと思われる。

『それにしてもなんだったのですの、あの怪物は……』

黒子が怪物のことに對して疑問を抱きながら空間移動によって鉄矢を戻していた。いくら考えても疑問は消えないため他人の知恵を借りようと教室へと空間移動していった。

何事もなかったかのように帰りの会が始まり、最後にさっきの化物に気をつけるという注意があり、あとは普通に解散した。

「黒子、さっきの化物に邪魔された話の続きだけど、セブンスミストに寄らない？」

セブンスミストとは、ここ周辺の服屋の中で一番大きい店である。

「申し訳ありませんですの。私は先ほど現れた怪物のことを風紀委員に報告しなくてはなりませんので。では失礼ですの」

そう言うとき黒子は急いで教室を出て行き、靴箱のところで靴を履いて走りながら風紀委員第177支部に向かつて空間移動していった。

風紀委員第177支部についた黒子はドアを開けて入っていた。

「な……なん……ですの……？」

黒子は目の前の光景に驚いていた。なぜなら、第177支部が全滅していたからだ。

部屋には血がたくさんとびちり、その真ん中に青のツインドリルにドレスをきた女がいた。

「遅かったな」

女は黒子にそういった。

「あとはお前だけだ」

そう言つて女は地面に赤い宝石が先端についていて、杖を立てて、こつ唱えた。



## 手下

「我戴くは漆黒の翼。墮天の証。神をも裏切り破壊を尽くす銀の力。今此処に全てを放ち、我が身に宿れ」

そう言う杖が光りだし、杖は女に巻きついていった。少したつと杖は全て女にまきついて消えていった。

「さあて……」

女はそう言った後、黒子に向かって走っていった。

「はや」

10m程度は離れていたのにそれを一歩強く地面をけるだけで黒子のもとまでついたのだ。黒子の目の前で女は蹴りを出したが、黒子は両腕をクロスさせて蹴りを防いだ。そして女は黒子から離れてこ

う言った。

「この程度か……つまらんな。私が手を下すまでもない」

そう言う女は体は光だし、光が目の前に収縮し再び杖となった。杖を立てると女の目の前の地面に一人が入る程度の魔法陣が展開された。

「ソギザライ、出番だ」

そう言う魔法陣からはまた怪物が現れたのだ。

## 策略

学校にいた怪物とはまた違う。

体中からトゲがたくさんでていた。

「じゃ、あとよろしくね」

そう言つて女の周りに風が吹き、目に見えないほど風が女に巻きつくと、風がやむとそこには女の姿は見られなかった。

女がなくなつたとたんソギザライと呼ばれた怪物はクルクルと回り始めた。

回り続けているうちにソギザライの足元の地面には、穴が開き始めていた。

『触れるのは不味そうですわね……。ならば体内に直接！』

黒子は左足の鉄矢いれに手を伸ばした。鉄矢を一本だけ取り出して人差し指と中指の間に入れて構えたその時だった。

高速回転していたソギザライは、黒子に回りながら向かってきたのだ。

『まずいですわね、鉄矢もああ動かれていますは転移できませんし、仕方ありませんわ。あれをするしか……。いえ、他に策があるはずですわ……。』

黒子はソギザライの回転攻撃から避けるべく、一番ソギザライから離れた場所に空間移動した。

再び追ってきたソギザライから一番はなれたところへと繰り返しになっていくうちにソギザライの遠心力がどんどんましてきたのだ。

『そろそろですわね……。』

何かを見計らっていたような黒子はソギザライがついてくるように走って屋上までいった。

屋上といっても二階建てのため、あまり高くはない。屋上の端っこ

にいった黒子はソギザライがこっちにくるのを待っている。

予想通りソギザライは黒子のほうへと向かってきたが、黒子はそれを空間移動テレポートによって軽々と避けた。

ソギザライは屋上から落ちてしまい、地面に衝突したせいで高速回転は止まっていた。

黒子はそれを見計らっていたかのようにソギザライの付近に空間移動テレポし、動けないソギザライに向かって鉄矢を体内に直接空間移動テレポートさせた。

校庭で戦ったやつと同じくソギザライは粉となって消えていった。

## 女

「一体何が起こってますの!？」

黒子はつぶやきながらあるところを目指して走っていた。

ある家のようなところに黒子は言った。扉には風紀委員第173支部と書かれている。ジャッジメント

「大変ですよ! 化け物達に第177支部の人たちが倒されてしまいましたわ!」

焦り気味にそういいながら黒子は173支部の中に入っていた。

「化け物?」

中にいる人が黒子の言葉に返答をくれた。黒子はここは倒されていないと安心して安堵の息をついていた。

中の人に案内されてソファに座り、事情を説明した。

「ふむ……魔術師か。俺達のほうでも調べてみるよ」

その時だ。ドアとは逆の壁から氷の槍が飛んできたのだ。

「なんですよ!？」

瞬く間に家を支える柱や壁が貫かれて、崩壊したのだ。黒子は崩壊に巻き込まれないよう外に空間移動した。テレポート

『またあの魔術師ですよ……?』

黒子は煙が晴れるのをまっていた。中々煙は消えず、あと少しで消えるといすときだった。

「舞い踊り、切り裂け! ウィンドカッター!」

声と同時にけむりの人影からはブーメランの形をした風の集合体が3発放たれた。テレポート

空間移動では突然だったので演算が間に合わず、ジャッジメント風紀委員で鍛えられた反射神経を生かして風を避けた。

「あ……あなたは!」

## 神の雷

けむりから現れたのは、第177支部の時に戦ったツインドリルの女だった。

「またお前か……まあいい。先ほどは殺し損ねたからな、今ここで殺してやろう」

不適な笑みを浮かべながら女はそう言った。

「魔術師は私達と違って、詠唱を言うことで魔法が発動するようですから、そこを叩けば魔法が発動できないんでしょう？ 不便ですわね」

「ホーリーランサー！」

突如彼女の杖から魔方阵が展開され、魔方阵から光の槍が現れた。

「詠唱を叩けば……なんだって？」

「詠唱がないなんて！」

「魔術そのものについて教えてやろう。魔術とは、特定の言葉を出した時に現実の事象に対して何らかの影響を与えること。詠唱とは、先ほどの魔術の破壊力を強化するものだ。そして魔方阵。魔方阵とはどこを攻撃するかを決める座標のようなものだ。どうだ、詠唱を必要としない疑問が解けただろう」

「そうでしたの……わざわざご親切にありがとうございます。でしたら、魔術を全てよけて隙を叩けばよいだけのことですわね！」

そう言っただけで黒子は女に向かって走り出した。

「ニヒリティブレイド！」

女の杖からは再び魔方阵が展開され一本の刃が放たれた。

刃は黒子の顔のど真ん中を狙っていた。

黒子は風紀委員で鍛えた反射神経で軽々と避けた。

黒子は攻撃が届く間合いに入り、思いつき右足での蹴りを繰り出した。

「グレイブ！」

突如黒子の足元に魔方陣が呼び名に呼応するように現れた。そして黒子の足元には小規模の地割れが起こった。

態勢を崩した黒子は蹴りがとどかないまま地割れに。

「痛っ……」

「まばゆき光彩を刃となして 地を引き裂かん！ サンダーブレード！」

遙か天空から黒子目掛けて雷で造形された刃が一本、無防備な黒子目掛けて降ってきた。

## 悪魔

黒子は空間移動テレポートでそれを避けた。

雷の刃が落ちた瞬間、辺りに電撃が飛び散った。

黒子は相手の攻撃に反応できる位地に空間移動テレポートし、内ポケットから携帯電話を取り出した。

「警備員の方ですか？ ジャッジメント 風紀委員第177支部所属の白井黒子と申します。今から写真を転送しますので殺戮許可を。

このままでは学園都市が危ないですの！」

そう言つて黒子は電話きり、小型端末機のような携帯から薄いウィンドウを引つ張りした。指でウィンドウをチョンチョンとさわリ、ウィンドウを相手に向けボタンを押した。すると、すぐにメールが届いた。”殺戮許可”と書かれていた。普通は何か特別な理由がないといけないのだが、このさい気にしなかった。携帯を内ポケットにしまつて笑みを浮かべながら女にこう言つた。

「やつと遠慮せずにいけますわね……」

そう言つて黒子は女の頭上に空間移動テレポートし、女にドロップキックをした。

「ぐあつ！」

痛感言語を發して地面に倒れた。

そしていつものように黒子は鉄矢入れから鉄矢を10本取り出し、扇子のように広げて女に言つた。

「動かないでいただくとうれしいですわ。余計な被害がでなくて済みますもの」

「つくづく甘いな……そんなことを言わずにしとめればいいものを。フレイムピラー！」

黒子の少し前に魔方阵が展開された。そこからは炎の刃が現れ、黒子突き刺そうとしたが黒子は空間移動テレポートで軽々とよけた。

「そうですね……なら本気でいきますわ！」

女は立ち上がり、何度かバックステップをし、近からず遠からずのポジションを取った。杖を立ててこう言った。

「本気か……どんなものかみせてもらおう！ 我戴くは漆黒の翼。

墮天の証。神をも裏切り破壊を尽くす銀の力。今此処に全てを放ち、我が身に宿れ！！！」

立てられた杖は光だし、どんどん女の体に巻きついていった。その姿はまるで悪魔だった。その隙に黒子は先ほど取り出していた10本の鉄矢を直していた。

「ふう……」

女は息を整えた次の瞬間。

「はやっ」



## 意気込み

ジャッジメント

風紀委員第177支部と戦って時の同じパターンが起きた。

一蹴りで黒子のもとまでついて、蹴りを繰り出した。その蹴りを黒子は両手をクロスして止め、女は再び距離をとった。

『まずいすわね……相手が動き出したら演算が間に合うかどうか……相手が動く前に先手を仕掛けませんと！』

そして黒子は相手の頭上に再び空間移動した。

ドロップキックを放ったが、相手は即座に反応して手で受け止めた。  
「なっ……！」

女はそのまま黒子を振り回し、地面に叩きつけようとした。  
なんとか黒子の演算は間に合い、叩きつけられる寸前で空間移動した。

『反応が速いですわ……』

「この程度か本気が、つまらんクズだな。暇つぶしにもならないな」

「そんなに死にたいんですのね……分かりましたわ、お望みどおり！」

そう言つて黒子は相手の遙か上空に空間移動した。

「空へ飛んだか……甘い！」

突然彼女の背中からは漆黒の翼が現れ、それを用いて女は空を飛んだ。

グングンと縮まる距離で、黒子に近づきながらも女は詠唱をしていた。黒子はまだ気づいていない。

『よし、来ましたわ！ 空なら被害がでません……やるなら今！』

## 歪み

黒子が意気込んだその瞬間、黒子と女の間に歪みが発生した。

女は構わず突っ込んでいったが、歪みがなぜ発生したのかという疑問を抱いていた。

「なんだ……？」

空間の歪みは突如大きくなり、辺りの雲や女全てが空間の歪みに引っ張られた。

「なんだこれは！」

翼が空間の歪みに触れた瞬間、翼が飲み込まれた。

翼ごと体は引っ張られ、危ないと思った女は翼を自ら外した。

翼が飲み込まれた後は空間の歪みは収まり、辺りには雲ひとつない快晴となった。

翼を飲み込まれた女は急降下した。黒子も空間移動テレポートで空へ転移した。だけで空を飛べるわけではない。二人とも地上へむかって急降下した。

黒子は空間移動テレポートで着地できるが、女はどうするのだろうか。ふと黒子の頭に疑問がよぎった。

地上にどんどん近くなり、黒子の空間移動テレポートが地面に届く範囲になったので黒子は先に空間移動テレポートして地面に着地した。

次に女が降りてきて、地面に落ちる前にこう言った。

「クツションゼリー！」

地面に向けられていた杖からは魔方阵が展開され、怒涛の勢いで水が噴射された。最終的には水は弾力性をもった玉となり、女をやさしく包み込んだ。

そして女の体は光だし、光が前方に収集されると同時に光は杖の形を象った。

「空間移動テレポートにそんな使い道があるとは知らなかったな。この私をもっと楽しませてくれ！」

そう言つて女は黒子のほうに杖をむけて唱えた。

「天空を満たす淡き光の精霊たちよ。我が声を聞き、我が祈りを聞き、汝らの力を今此処に具現し、光の洗礼を与えよ！」

詠唱を言つた後に黒子の頭上には巨大な魔方阵が展開された。

「さすがですわね。こんな大きい魔法陣。どんな魔法なの？」

「安心しろ。今すぐ発動してやる。シャイニンググレイン！」

魔方阵は魔法名に呼応して光りだした。

「な……」

## 光雨と霧

光で造形された槍の雨が降り注いできたのだ。一つの光の槍は、地面に巨大な穴をあけた。穴を開けたというより貫通したというほうが正しいだろう。

「面白いすわね！ 私の空間移動テレポートで全て避けて差し上げますわ！」別に相手の付近に空間移動テレポートすれば槍は届いていないからいいのだが、遊び半分に黒子は槍を避けようとした。

次々と迫り来る光の槍を次々と退けた。あるときは風紀委員ジャッジメントで鍛えられた反射神経を生かして。あるときは空間移動テレポートでよけて。

またあるときは槍そのものを別の場所に転移させたりなどだ。しばらく槍を避け続けると、光のやりの攻撃範囲から脱出できた。

「面白くありませんわねえ」

戦争を起こしたような光景を背景に女にそう言った。

「ほう。一つの城を破壊できるこの技でもお前は倒せないのか。いいな、面白いぞ！ だがこれはどうだ？」

「どんな魔法でも退けて差し上げますわ」

「大地に根差す氷の精 我に呼応して表れ出でよ！ 光を纏い輝くは青の精 大気に舞いしその身を以って！」

最初の詠唱の時点で様々なところに魔方陣が展開された。

次の詠唱で地面に大きな魔方陣が展開された。

「フローズンピラー、ダイヤモンドダスト！」

一つ目の魔法名で様々なところの魔方陣から、先端が平面の氷が表れ出た。

次の魔法名で地面の大きな魔方陣からは風が現れた。風は後に平面の氷を削っていき、辺りを覆い隠すきりとなった。

「お前らの空間移動テレポートやは位地を把握していないと空間移動できないのだろう？ 術者である私には貴様の位地がハッキリと分かるぞ！

さあ、さっきまでの余裕を持って攻撃を仕掛けてくるといい！」

辺りの霧が山びこのように声が反射された。

「どうした？ こないのか？ ならばこちらから行かせてもらおう  
！」

「霧なんて私の前では無意味ですわ」

## 手違い

その瞬間、辺りの霧が消えたのだ。

「な……なんだ……これは！」

「私の空間移動テレポートを用いて霧と氷柱を他の場所へ転移させましたの。さてと……そろそろお遊びはおしまいですわ！」

そう言つて霧が晴れて居場所がわかった女のほうに走りながら鉄矢いれのホックを外し、右手に持った。

そして相手の背後に空間移動テレポートし、地面に足が着く前に鉄矢いれを左手で身がから左へと撫でていった。

光の雨のように降り注ぐ鉄矢の雨となった。

「甘いと言っている！ 光よ、我を守る壁となれ、ホワイトホール！」

瞬時に女の頭上に魔方陣が展開され、一瞬のうちに半透明になっていき、バリアのようになった。

降り注ぐ鉄矢に対して女の上で鉄矢がバリアによって防がれていた。頭上に集中している女に、黒子は攻撃を仕掛けた。

すぐさま相手の懐に空間移動テレポートし、足払いをした。黒子はすぐさまバリアで防がれて地面に落ちている鉄矢を女の服に転移させ、地面に貼り付けにした。

「何故だかしりませんが、みなさんこの攻撃に弱いんですの。登校中に戦った銀行強盗もこの攻撃を受けてしまひまして……少しおとなしくしてくださいね」

黒子は懐からスタンガンを取り出し、女を気絶させた。

「すいません、手違いで殺戮許可がでたんです……。本当に申し訳ございません！」

警備員が黒子に対して頭を下げて誤っていた。

「いえ、よろしいですわ。結果的に拘束で終つたのですから」

**風紀委員第175支部（前書き）**

予約してたぶんが終わっちゃったあ。  
また予約しとかないとなー。

## 風紀委員第175支部

「いてっ！」

例の女によって傷つけられた風紀委員第177支部及び第173支部の人達は、第175支部に集まって治療を受けていた。

手当てをしている人の中に、黒子の姿も見られた。

女に何故風紀委員達を傷つけたのかを聞いたところ、ここ周辺にある規模の巨大な悪組織があるらしい。

そのなかには行き場を失った魔術師や超能力者が多くいて、前代未聞の超巨大な戦争を起こそうとしているらしい。

それを食い止めるべく、彼女がある組織から派遣されてきたそうだ。そして彼女は風紀委員とその組織を勘違いしてしまったのだ。

自分達の組織名及び名前は現段階ではあかせないとか。

「では、私は学校に行つてまいりますわ」

と言いながらカバンを持って黒子は第175支部を出て行つた。

途中、女に荒らされた風紀委員第177支部に念動力者や木を操る能力者が集まって直してくれていた。

「【才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術】それが魔術だ。近頃魔術師が増えてきて、この前白井が勤めている風紀委員第177支部が襲われたそうだ。魔術という法則を使うということは学問でもありしっかりルールを守らないと使用する事ができないんだ。逆に言うとな正規の手順を踏めば素人でも使える。それが魔術だ」

先生が言っているのとまったく同じことが黒板に書かれていて、それをほとんどの人は話を聞きながら書き写していた。

「ここまでテスト範囲だからちゃんと勉強するように！」

黒板にチョークでドンとつくと同時にチャイムが鳴った。時計の針は1時半ピツタリ。

何故今日はこんなに早いのかというと、明々後日はテストがあり、



勉強しろということだ。

もうひとつの理由として、午後2時からほとんどの先生が柵川中学に集合しなければならぬから、もう1時半に終わらせようということになったというわけだ。

## セブンスミスト

「黒子黒子！ 今日こそどっか行こうよ！ セブンスミストとかセブンスミストとかセブンスミストとか！」

「そんなにセブンスミストに行きたいんですの？」

「買いたいものがあるの！ コレとかコレとかコレとかコレ！！」  
わざわざカバンからIpadのようなものを取り出して、商品を指で指しながら説明してくれた。

「ま、いいですわ、最近風紀委員のお仕事<sup>ジャッジメント</sup>が忙しくて息抜きをしませんし……」

「決つまりー！」

そう言つて黒子を引つ張りながら教室をでた。

「さあ、何階からいく！？」

Ipadのようなもので何の服が何階にあるか調べながら黒子に向かつて問いかけた。

本当は聞いても自分がそこに用事がないと行かないくせに。

「あなたの好きなにして構いませんわ」

女はIpadとにらめっこしながらこういった。

「やった！ じゃあ最初は2階でワンピース、次は5階でその時だった。」

「キヤー！」

あたりに女性や男性の悲鳴がとびかった。

「水月はお客と一緒に非難を！」<sup>みずき</sup>

水月とは、前の席の彼女の名前である。

黒子が進もうとすると、水月は腕をつかんだ。

「私もいく！」

## 水月

「風紀委員でもない方が事件に首を突っ込むのは」

黒子の注意は、再び悲鳴によってかき消された。

黒子が説得しているうちにすべての客はいなくなり、上の階段から焦る様子もなくゆっくりと歩く音がした。

「何だ、まだ客がいたのか」

黒子は水月の手を振り払い、階段から降りてきた男に向かって風紀委員の腕章を見せた。

「風紀委員ですの！ 悲鳴が起こる理由はあなたですわね？」

「……あながち間違いではないな。ほかの客同様お前たちもさっさとうせるがいい。さもなくばこの地にはいつくばることになる」

「まったく……こつちが黙ってたらない放題言うのね。どんな能力が知らないけど、私と黒子の本気には勝てるはずがないわ」

水月のその一言によって男の雰囲気がか変わった。

「そんなことは俺の実力をみてから言うんだな！」

そういうと同時に男は黒子たちのほうに向かってきた。

そして水月に向かって殴りかかったが、水月は避けたり止める動作をせず、ただ拳がくるのを待っていた。

## コンピネーション

”バシャッ”

なんと、男の拳は水月の体をすり抜けたのだ。

「何っ!？」

男は即座に水月から離れた。

「光学操作系能力者か……」

男は物体をすり抜けたことから、光学操作系能力者と読んだ。

「残念」

そう言つて水月は口元に笑みを浮かべた。

すると、少したつと同時に水月の足元からは突然水が噴出した。<sup>ふきだ</sup>

そして男に手向けるとそれに呼応するようになんとかの束となり水が不自然な軌道を描いて男に向かっていった。

男は次々と迫り来る水を退けた。

迫りくる水をすべて避けると、男は地面に手をつきスピードを殺した。

「水流操作系能力者か。面白」

「動かないでくださいますの？」

水月のいた場所から男の背後へと一瞬で空間移動し、いつも身につけている鉄矢を右手の指にはさんで構えていた。

「ふん、動いたところで貴様の攻撃は俺には当たらん」

そう言つて男は振り返り、黒子に遠心力を利用した蹴りを放った。

黒子は蹴りを腕でなんとか受け止めた。

「ここまでは予想通りだな」

口元に不気味な笑みを浮かべながら男はそういった。

## 紙

笑みを浮かべた次の瞬間、なんと男が消えたのだ。いや、正確には紙になつて消えたというほうが正しいだろう。

あたりに散つた紙は黒子を取り囲むようにし、折り紙をおるように紙がパタパタと折られていった。

「紙なんかあたしの水で砕いてやる！」

水月がそう言いながら大きく腕を振つた。腕の軌跡には水が残り、すべての水は細かく分かれて丸い水滴となつた。

そして手を紙に向かつて手を伸ばすと同時にあたりに散らばつた水滴は弾丸のように高速で射出された。

放たれた水滴はありえない軌道を描いて黒子だけを上手に避け、一滴一滴確実に、紙のど真ん中を貫いた。

「紙なんかあたしの水の相手じゃ」

「つくづく甘い……」

水月の言葉を男がさえぎると同時に貫かれた紙は貫かれた場所だけが再生され、再び穴一つ開いていない紙に戻つた。

そして全ての紙は人の形を模り、<sup>かたど</sup>男の姿となつた。男の姿が完全に戻る前に、黒子は水月のところへ空間移動した。<sup>テレポート</sup>

「この程度か……」

## 手助け

そう言うのと男の体が再び紙となった。といっても、髪をすくのと同じように体が少し薄くなるだけで、男の姿は保たれている。

男から離れたもう一つの体、『紙』は一枚一枚が連なりあい、刀となった。

男は紙で象られた刀を握り、黒子達目掛けて走ってきた。

「はああああ！」

発声とともに刀を右上から左下へと大きく振った。黒子は後ろに空<sup>テ</sup>間移動し、水月はその場に止まっていた。どうせ刀が当たろうとすり抜けるだけだからだ。

案の定紙の刀は水月の体をすり抜けただけだった。

多少の水滴がついた紙の刀を再び水月目掛けて我武者羅に振り続けた。

「無駄だつてば」

そう言うのと突如男の足元に静かな池に水滴が落ちたように数円が発生した。そしてすぐにその円からはロープ程度の細さの水が現れ、男の足に絡みついた。

「こんなもの！」

男は足に巻きついた水を刀で必死に切っていた。切れることなどないのに。

「くっ……！」

切れないと悟った男は刀と一緒に体を紙に変化させ、水から離れた。そして再び数メートル離れた場所で人の形を象っているそのときだった。

突如紙からは鉄矢が現れた。水月が後ろを振り向くと、黒子が鉄矢入れを右手に持っている様が見られた。

「鉄矢が体の形を象っているのに邪魔なはずですよ！ 今ですよ、水月！」

## 液体使い

黒子がそう言うとき水月は微笑んで力むと何の前触れもなく水月の左右からは糸のように細い水が何十本も、いや何百本も放たれた。水の発生源である根元は固定されたまま、細い水はどんどん紙に巻きついていき、人の形にならないように一枚一枚を分けた。紙と紙がくっつかなければ、人にはなれないからだ。

「とりあえず、拘束かんりよー？」

水月は黒子のほうを向いて微笑むと、黒子も微笑み返して

「ええ」

と答えた。

――帰宅中

黒子は男を警備員アンチスキルに送り、寮に帰っていた。

「いつまでついてきますの!？」

黒子は後ろからずつついてきてる水月に迷惑そうに言葉を投げかけた。

「いやあ、黒子に話があるからさ」

「何ですの?」

「風紀委員に入りたいんだけど! どうやったら入れるの?」  
ジャッジメント

「確か、『9枚の契約書にサイン』『13種類の適正試験』『4か月に及ぶ研修』ですわね」

「なにそれ、めんどくさ」

言葉で言ったとおり、水月はすぐめんどくさそうな顔をしていた。

「まあ、あなたの能力液体使いリキッドマスターと成績、あと私の推薦があれば恐らく契約書だけですむと思いますわ。身体能力もそこそこありますし

……」

「えっ、何々黒子そんなに威厳があるの?」

「超能力者第3位の貫禄ですわ」

## 依頼

カリキュラム  
学校の授業が終わり、黒子は風紀委員第177支部へと向かった。

扉を開けると、大分部屋に家具が配置されてきた。何とか活動は再開できそうな感じだった。

「黒子、遅かったね〜」

机に肘を突き、手に頭を置いていた。

「まったく……同じ支部なんですから一緒にいけばいいんですのに……」

鞆を机に置き、椅子に座りながら隣の机に座っている水月に言った。

「じゃ、黒子いこっか!」

と、言いながら水月は黒子の手を引いた。

「な……どこにですの!？」

黒子がそう聞くと、水月は後ろを振り返った。

「決まってるじゃん、依頼よ依頼!」

そう言って前を向き、黒子の手を引っ張りながら風紀委員第177

支部を出た。



## 花牟礼

「……何ですか？ この巨大な屋敷は……」

「ここが依頼主の家だよ！ うん、花牟礼<sup>はなむれ</sup>って書いてるから間違いない！」

水月は表札を見ながら言った。

そして画面付インターホンを押して、

「すいませーん！ 風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>のものでーす！ 依頼を受けてまいりましたー」

画面付インターホンが遠いわけでもないのに、大きな声で言った。

画面付インターホンから何も返事がないまま、門が開いた。

二人は緊張しながら無言でくぐると、今度は家の扉が開いた。

「よくいらしてくれました」

そう言いながらおじいさんが出てきた。

「どうぞ、おかけになってください」

そう言ってソファに指を指した。

黒子達が先に座ると、おじいさんも座った。

「すごいお屋敷ですねぇ……」

水月が正直な感想を述べた。

「どうもありがとうございます。では、さっそくなんです……」

「はい、分かりました。どこですか？」

「地図をお渡しますので少々お待ちください」

そう言っておじいさんは席を立った。一つの扉を潜り、すぐに戻ってきた。

「これです」

そう言っておじいさんは腰を下ろしながら地図を机に置いた。

「分かりました！ では行ってきましたー」

そう言って水月はさっそく歩き出し、それを追う様に黒子もついていった。

「一体依頼内容ってなんだったんのですの!？」

地図を見てキヨロキヨロしながら水月は返答した。

「ん」とね、この家に一人の女の子がいて、その子が「Battle Of King」バトルオブキング《バトルオブキング》に出るらしいの。それでね、その「Battle Of King」バトルオブキング《バトルオブキング》は最近危険な動きがあるんだって。出場者が大会開催者と組んで、不正行為を認めるんだってさ。それにこの「Battle Of King」バトルオブキング《バトルオブキング》で最近死者が続出してるらしいの……。だから、その女の子に危険が及ばないように守ってくれと言う訳」

「な……なんで私まで巻き込みますの!？」

「女の子にバレないようにしろだってさ。まあ危険性がましたときは飛び出していいんだって」

黒子の質問をまったくもって無視し、依頼内容の続きを言っていた。

「はあ……受けたからには仕方ありませんわ。私もついていきますの」

## 花牟礼舞曲

「……でつかいドームだなー」

木陰に隠れた黒子と水月は、あまりの大きさに飽きれていた。先ほどの屋敷ほどではないが、時々しか使われないのにもったいないね等と話し合い、

女の子が選手メンバーの名簿にサインをしたのを見て、黒子達は見学メンバーの方にサインをした。

女の子は選手入り口へ、黒子達は観客席へと行った。

「……第一回戦のシングルマッチは……この二人だあ！」

マイクを持った派手な衣装の男は、そう言うと同時にボードを指した。

ボードには名前がどんどん現れ、速度は遅くなり、やがてとまった。ボードには、さっそく彼女の苗字が出ていた。

「お、あれだよあれ。花牟礼……え……」

途中まではしゃぎながら言っていたものの、彼女の名前と顔を見たときに驚いていた。

「は……花牟礼舞曲……ですわよね……？」

「う……うん……」

何故二人が名前を知っているか。それは、彼女がクラスメイトだからだ。ずっと後姿を見ながらつけてきたので、顔はみてないのだ。しかも制服をきていないし。

驚いているその時、聞き覚えのある声がした。

「お……お前たちが何故ここに!？」

## 翼

それは、黒子が戦った魔術師であった。

「な……あなたこと何故ここに!？」

と、黒子が聞き返すと、返事をしてくれた。

「私は最近ここで奇妙な噂が流れていてな……それを食い止めるべくやってきたというわけだ」

「奇妙な噂って？」

配属されたばかりで顔もしりもしない水月が、知り合いかのように話しかけた。

「……………奇妙といえるのかどうか分からないが、不正行為が行われてるとのことだ」

「そうでしたの……。一応目的は重なっているようですわね。私たちは、今ボードに選ばれた花牟礼はなむれさんを不正行為から守ってくれとの依頼があったんですの」

「そうだったのか……」

と、話が絶えると同時に開始の合図が出された。

魔術師を含めた黒子達はじーっとステージに出ている花牟礼はなむれと敵を目視していた。

「何だ、こんな餓鬼が相手か」

相手と思われる男が、花牟礼はなむれをみて言った第一声がそれだった。

花牟礼はなむれは黒子達のクラスの中でも一番背が低いのだ。幼くみられるのは仕方がない。

「……………」

暫く続いた沈黙を、男が破った。

「はぁぁぁぁ!」

と、言いながら突っ込んでいった。チョキの人差し指と中指をくっつけて。

そして花牟礼はなむれに手が届く範囲に入ると、くっつけた右手の人差し指

と中指を左から右へと大きく振った。

はなむれ花牟礼は後ろに避けたが、1テンポ遅れたウェーブのかかった髪の数本が、男の指によって切られてしまった。

「!?!」

髪が切れたのを見て危険と判断し、急いで花牟礼は距離をとったようだ。

「ハッ、驚いてるようだな。どうせお前はここで終わるんだ、教えてやるぜ。俺の能力は手刃切断テンブレードといってな、触れた場所を切り裂くことができるんだ。どんな鋼鉄でも斬れるのを代償に、範囲は手の根元から指先までという狭い範囲しかないっていうわけだ」

「……………」

相変わらず説明を受けても無言だった。

「……………! 目つきが変わった!」

## 手刃切断

花牟礼はなむれの目は、先ほどのおだやかな目ではなく鋭い目つきとなっていた。

再び向かってくる男に対し、今度は花牟礼はなむれからもぶつかっていった。背中に翼を出しながら。翼が完全に開くと同時に彼女のスピードは格段に上がり、男が反応する前に蹴りを繰り出した。

「!？」

男はいまだに何が起きたのか分かっていない様だ。男が起き上がるのを花牟礼はなむれは待っているようだ。

「くっ……なめやがって!」

男は立ち上がり、今度はパーの指をくつつけたような形にした。

再び男は花牟礼はなむれに向かっていき、パーの手を思いつき、今度は右から左へと振った。

花牟礼はなむれは翼を使って上空へと大きく舞い上がった。

「くそが!」

男も怒りのせいか、常人をこえたジャンプ力で花牟礼はなむれに追いついた。

「あ…あれが人間の身体能力ですよ!？」

黒子はあまりのジャンプ力に驚愕していた。

もちろん、花牟礼はなむれもだった。

花牟礼はなむれはこんなジャンプを読んでいなかったので反応が少し遅れた。

男が繰り出した手刀を、ギリギリ後ろに避けて致命傷はさけたが、

男の手刀は頬をかすめたようで、頬からは少量の血がでていた。

次の瞬間だった。

## 大会中止

突如会場の壁が轟音とともに爆発し、多々の観客を吹き飛ばした。

「は、いたいた。はなむれまい花牟礼舞曲みーつけた！」

「まったく……頑丈な壁だな」

煙の中から姿を現したのは、4人の女だった。

「大会中止ですわ！」

水月、魔術師、黒子は手すりをこえ、はなむれ花牟礼の前へと移動した。

「し…白井黒子さんに月見里水月さんやまなしみずきに…？ 何故ここへ！？」

「あなたの親から護衛をするように頼まれたんですの！」

「あたしも同じく！」

「私も同じということにしといてくれ」

3人ははなむれ花牟礼の疑問に答えた。

「それより、目の前の敵に注目してくださいまし！」

そう言われたはなむれ花牟礼は前を向いた。

左から順に、背が小さく、青い髪に青い服、氷の翼のような敵。

パジャマのような服をきて、帽子に月のバッチをつけて、本を持っ

ている敵。

白いポニーテールの髪に緑色の服に刀を持っている敵。

うさぎの耳に人間の顔に体、そして赤い目を持っている敵。

そして再び左から右へと名乗っていった。

## 自己紹介

「自己紹介でもしようか。私の名前は慈雨じうだよ」

「蘭素ランス……」

「依秀音いでねと申します」

「七音どれみです」

そして今度は黒子達が名乗った。

「白井黒子」

やまなし

「月見里水月」

はなむれ

「花牟礼舞曲」

「サルビア・シリスだ」

最後の名前は、魔術師の名前だった。

「わざわざ名乗ってくれなくてもいいんだけどねえ……どうせ覚えられないし」

慈雨じうがそういった。

「なら覚えなくていいよっ！」

最後の言葉にカチンときたのか、水月が手を前に構えた。

手には水が現れ、みるみるうちに剣となった。

「4対4はめんどうだからさ、1対1にしようよ。そっちが誰と戦うか決めていいからさ」



## 一 慈雨へじう vs 水月

提案したのは七音<sup>どれみ</sup>だった。

「言ったわね<sup>ランス</sup>。あたしはあんた！ 慈雨<sup>じう</sup>とかいうやつ！」

「では私は蘭素<sup>ランス</sup>さんと」

「私は依秀<sup>いでね</sup>音と」

「では私は七音<sup>どれみ</sup>さんでよろしいですわ」

水月<sup>みづづき</sup>は慈雨<sup>じう</sup>に。

花牟礼<sup>はなむれ</sup>は蘭素<sup>ランス</sup>と。

サルビアと名乗った魔術師は依秀<sup>いでね</sup>音と。

白井<sup>しらい</sup>は七音<sup>どれみ</sup>と、各自戦う相手が決まった。

「じゃ、最初は私たちが戦おうか」

慈雨<sup>じう</sup> vs 水月

「あたしをなめんじやないよ！」

先ほど造形した水の剣を持って、慈雨<sup>じう</sup>のほうへと走っていった。間合いに入ると剣を突き出した。

「甘い甘い、この程度の剣術<sup>けんじゆ</sup>じゃ<sup>ね</sup>。依秀<sup>いでね</sup>音に鍛えられた私にそんなへボい剣術は効かないよ！」

「ふん、調子にのるんじゃないよ！」

剣をブンブンと振り回した。

「だから無駄だってば」

「なら……これは……どうだ！」

再び剣を大きく振った。いや、それはもう剣ではなく……。

## 氷使い

剣ではなく、鞭となっていた。

「鞭の軌道は読みにくいよ！」

水月は鞭を慈雨<sup>じう</sup>目掛けて振った。

「そろそろ遊ぶのやめないとさ」

そう言うと同時に鞭へと自分から手を伸ばした。

鞭が慈雨<sup>じう</sup>の手に触れると同時に、水から氷となった。

「な…!？」

どんどん凍り付いてゆく水に、このまま鞭にふれていては私まで氷付けにされてしまうと判断した水月は、鞭を手から放し、後ろに遠ざかった。

「水使いなんて、私と相性が悪いよねっ！」

今度は慈雨<sup>じう</sup>から攻撃を仕掛けた。

「避けないと怪我するよ！」

慈雨<sup>じう</sup>は冷気が漂っている手を大きく振られ、振られたと同時に冷気が構築し、多数の氷の槍となった。

しかし、氷の槍が目の前にきても水月は動かなかった。

”バシヤッ”

## 違反

「な!？」

槍は彼女の体を通り越した。

「この私にそんな物理攻撃は効かないよ!」

今度は水月が手を振ると、そこからは膨大な水が現れた。

膨大な量の水はまっすぐに慈雨へと向かっていった……が。

八方向に花のように広がった氷の盾で、膨大な水の量は止められてしまい、氷付けにされて崩れてしまった。

その時だった。

水月の背後から、サルビアが放ったと思われる稲光とともに雷が放たれた。

雷は慈雨目掛けて進んだ。

「……違反行為だね。みんな、4 v s 4で滅茶苦茶にしてあげよう」

慈雨がそう言いながら雷を一瞬のうちに氷付けにした。

そして、観客席にいた残りの3人が慈雨の元へときた。

それは黒子達も同じこと。

慈雨が動こうとしたその時だった。

## 始末書

突如慈雨達を後ろの壁を完全に破られ、怒涛の水が押し寄せてきた。

「な……！？　こんなもの氷付けに」

慈雨の氷が発動するまえに水は一瞬のうちに慈雨達を飲み込んだ。

この水を彼方から呼び寄せた水月は自分たちに当たらないよう水を寸前で止めた。

そして勢いよく回転させると同時にじわじわと水の中にある全てのものを圧縮していった。

「私のこの能力の最大の特徴『増殖』。水が別の物に染み込んでいき、それを任意で水に変えていき、それを私の水として操ることができる。」

要は、私の水を媒介に周囲の物を無限に巻き込んでいき自在に操ることができるとわけ。このおかげでLV5になれたんだよ！」

最後らへんはもう黒子達のほうを向いていつていた。

「す……すごい……」

花牟礼は驚いていた。

完全に水が圧縮された。

「どうしますの？　全員いなくなりましたけど……」

「あ！　ねえ黒子……これってもしかして始末書書かないと……いけないんじゃない……」

「え……ええ、そうですわね……」

『この前の事件で始末書かかされたばかりですのに……』

## 花牟礼

「まったく、危険だから止めたって言うのになんで始末書書かないといけないのかなー」

水月と黒子は、授業が終わり風紀委員第177支部に行っていた。ジャッジメント

「仕方ないですわ。上層部には融通がききませんから」

そんなことを言っているうちに二人は風紀委員第177支部についた。ジャッジメント

「あ、黒子さんに水月さん、今日から宜しくお願いします！」

そこには、なんと花牟礼はなむれがいたのだ。

「な……何故ここに……？」

「風紀委員ジャッジメントになったんです」

「ど……どうやってですの！？ まだあれから一日しかたってませんのに……」

そう黒子が聞くと、花牟礼はなむれは黒子の耳元に近づいた。

「ちょっと裏の方法を使ってね」

耳元で花牟礼はなむれはそうささやいた。

『おそろしい子ですわ………』

「じゃ、先輩達、いきましよう！」

「どこにですの………？」

『まさかこの展開は………』

「決まっていますよ、コレですよコレ！」

そっぴいながら自分の机にあるPCを指差した。

それに黒子達は近づいて、どんな依頼内容かを見てみた。

## ペーパーテスト

「昇格試験ではありませんの！」

「そうですよ」

「な……昇格試験っていくらなんでも」

「ペーパーテストと実力を見るためのテストだね。いいじゃん、面白そうだしうけてみようよ」

「うけよ！ うけよ！」

「ですが」

「多数決で受けるにけっ！」

『明らかにペー<sup>ス</sup>を持ってかれてますわ……………』

「……」  
「これから、<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員の体長にふさわしいかのペーパーテストを行う。ルールはこの通りだ」

といいながら黒板を指した。

黒板にはこう書かれていた。

最初から書く受験者は満点の10点が与えられている。試験問題は全部で10問・各1点とし、不正解だった問題数は持ち点から点数が引かれる、減点方式。

試験はチーム戦。つまり、受験するチーム人数×10（黒子達の場合合は3人で、合計30点満点）で競われる。

カンニングとみなされた場合は、その行為一回につき持ち点から2点ずつ減点される。

試験終了後までに持ち点全てを失ったもの及び正解数が0だったものは失格となる。また、そのものが所属するチーム全員を道連れ失格とする。

「試験時間は一時間だ。はじめろ！」

『まずは名前とクラス、支部を書くんですけど……。第一問目ですの』

## 結果発表

「……………」「どうでしたか？」

試験が終わり、結果発表まで時間があるから3人はおしゃべりをしていた。

「2問しかわかんなかったよお」

今にもなきそうな顔をして水月がいった。

「私は全部解けましたけど……………」

「ええ！？」「はあ！？」

水月と花牟礼はなむれの言葉がかぶった。

「え……………」「なんですの？」

「一問目の答え、なんてしたか！？」

「aは0でないと実践するなんとかかんとかでしたっけ。確かあれは……………」

$f(x) = (3x^2 - 4)(x - a + a\frac{1}{a})$  で、

答えは  $a = \pm 1$  ですよ」

「頭がおかしくなります……………」

「結果発表をする！ 席につけ！」

合図によって皆急いで席についた。

「合格したやつらはいくらだ！」

白井黒子

月見里水月やまなし

一花牟礼舞曲はなむれまい だ！」

その後の話によると、合格したやつらには第一会場から出る時に第二試験が行われる会場が描かれた地図が送られるとのことだ。

## ルール

「……ルールは簡単だ。相手が気絶するか負けを認めれば勝ちとなる。10分間の休憩を行うので、各自準備を行え！」

休憩時間が始まったと同時に人混みを掻き分けて水月と花牟礼がやつてきた。  
はなむれ

「二人とも！ 何番目に出場だった？」

人混みを掻き分けながら大声で二人に問いかけた。こんな人が多いと話しにくいと思い、

黒子は自分を含めた三人を建物の上へと空間移動テレポートさせた。

「どれどれ？」

水月は誰と戦うか書いている紙を二人から奪い取って、眺めた。

「ふむ……。あつ！！」

「ど……どうしましたの？」

「舞曲まいといっしょだ……」

「ええっ！？」

確認するために黒子と花牟礼は紙を奪い返した。

「違うじゃないですか……！」

頬を膨らませて花牟礼は怒っていた。  
はなむれ

紙には水月とは違う名前が書かれていたからだ。

「いやいや、水月があがったらの話だよ」

焦って水月は弁解した。

「それなら私も当たりますわ」

「もし当たっても手加減なんてしないでね！」

「分かってま」

”選手の皆様は会場にきてください”

黒子の声を遮り、アナウンスの声が入った。

「もう時間ですね」



そう言つて黒子は自分を含めた3人を建物の上から会場へと一気に  
テレポート  
空間移動した。

## 危機

「多いな」

”では、さっそく予選の一回戦を開始いたします”

「え、早くない？　ってか予選！？」

「ほとんどの人はもう集合してたみたいですし……」

「あの……」

はなむれ花牟礼が黒子の耳元で囁いた。

「何ですか？」

「お手洗いにいきたいんですが……」

はなむれ花牟礼は恥ずかしげにいった。

「お手洗いつて、まい舞曲は次だよ？」

黒子のとなりからひよっこりと顔を出し、水月がいった。

「えええゝ！？」

”第七回戦を開始します”

「ちよつと早すぎるんじゃないんですの？」

「それが雑魚ばかりみたいでさー、一瞬でかたがつくみたい。さ、まい舞曲の勇敢な姿を見ようよ」

そう言つて水月は花牟礼のほうへと目を向けた。はなむれ

それに釣られるように黒子も花牟礼のほうを向いた。はなむれ

『はううう……はやくしないと……』

「START！」

レフェリーがSTARTといった瞬間、はなむれ花牟礼の四肢と肩からは翼が現れた。

地面を勢いよく蹴ると同時に肩の翼は羽ばたきだし、徐々に加速していった。

そして右足で右から左へと動かして蹴りを放った。

相手の男は腕で蹴りを防いだ……が、あまりの衝撃のためか、ステージから転げ落ちて場外負けとなった。

そして勝敗がついたところで舞曲<sup>まい</sup>は翼で飛び上がり一気にお手洗いへと行った。

## 水滴

「あははははは……そんなにトイレに行きたかったんだね」  
トイレから帰ってきた舞曲まいに問いかけた。

「笑い事じゃありませんよー！ 大変だったんですから……おかげで戦闘に集中できませんでした……」

「えっ？ あれが戦闘に集中してない人の戦いとは思えないほど

」

”オーーーーーーー！！”

突如水月の声を遮り、会場からは選手たちの大きな歓声がまきおこった。

黒子達もステージの方を向き、何が起こったのかを確認していた。ステージでは、予選とは思えないほどの激闘が行われていたのである。

「やはり、予選では能力をみせないつもりなのでしょうね……」

黒子の言うとおり、ステージでは体術による戦いが繰り広げられていた。

「うわー、何あの体術……風紀委員ジャッジメントに誘っちゃおうか！」

「もう風紀委員はいっぱいいますわ。今月だけで二人も風紀委員ジャッジメントに入ってきましたし……」

「だよね、エヘヘヘ」

”おーっと！ 藍非選手、後一步及ばず！ では、第九回戦を行います”

「あんな激闘が繰り広げられた後なんて嫌ですわね……」

「黒子の实力を見せてまた歓声を巻き起こしちゃいなよ！」

水月の声はすでに黒子の耳には届いてなく、黒子は戦闘に集中していた。

ステージの階段を上がり、STARTの合図を受けた黒子は相手から少しバックステップをして距離を取った。

男はベルトの後ろにつけていた一リットルペットボトルを外し、キヤップをあけた。

「さあて、とつとと終わらせるか」

そう言い終わるとペットボトルからは水が出てきて、黒子に襲い掛かってきた。

『水月の水に比べればこんなもの簡単に避けられますわ』  
そう思いながら軽い足取りで水を避けていた。

「この程度でやられると面白くなるよなあ。へへッ」

男がそう口にする、突如水は小さな水滴へと分散しはじめた。  
『なんですの……？』

「致命傷はやめとかないと、決勝戦までいけねえからな！」  
瞬く間に何千、いや何万もの水滴が黒子の周りを取り囲んだ。

## Drop Kick

『すぐに空間移動できるようにしませんと……』  
テレポート

「じゃあな！」

そう言うと同時に水滴が突如回転だし、何万もの回転している水滴が黒子目掛けて放たれた。

”バシャッ”

水滴と水滴同士が当たり、勢いがなくなり、一リットルの水は男の付近を漂っている。

「いないだと!？」

「当たったら痛そうですね」

男は黒子の声がする後ろを向いた。

「くそが！」

水滴が集合しあった一リットルの水を再び黒子目掛けてはなった。

「そんな遅い攻撃効きませんわ」

黒子は男の後頭部に空間移動し、テレポートドロップキックを当てた。

「ぐあっ!？」

ドロップキックにより男は地面に倒れ、男は気絶した。

”勝者、白井黒子!”

黒子は得意げな顔をしながらステージから降り、水月達のところへ向かった。

「さっすが黒子、やっるう！」

そっついながら手と手をパチンとたたき、チェンジした。

「がんばってくださいまし」

”第十回戦を開始します”

## 波紋

「さあて、どう遊んであげようかっ」

水月は余裕の表情だった。

「あんたみたいな餓鬼が相手え！？ あはっ、得だわっ」

厚化粧をした女がそう言った。

「おばさん、私をなめると痛い目見るよ？」

「お……おば……おばさん！？ この餓鬼があ！」

そう言つて女は水月の挑発（？）にのり、地面に思いっきり掌をくつつけた。

「あたいが攻撃をはじめれば、お前なんか一瞬で死ぬんだよ！」

そう言い終わると同時に、水月の足元にある海上のコンクリートが膨れ上がった。

「な……！？」

焦っている水月に女の攻撃が襲い掛かる。

コンクリートが割れ、むき出しになった荒々しい地面からは土で構成されたと思われる槍が水月目掛けて飛び出した。

「あつぶないなっ」

体を貫いた槍を手で握りながらそう言った。

「ば……化け物かお前は！」

女は驚愕と同時に混乱していた。

「化け物なんか呼ばれ方、嫌いだな」

突如水月の声が真剣になると同時に、女の足元からは波紋が発生した。そして波紋からは怒濤の勢いであふれ出す水柱が現れ、女を大きく水と共に打ち上げた。

さらに水は、追い討ちをかけるように水は女より少し先にいき、無防備な彼女の背中に逆戻りをして突っ込んだ。

女はステージの上に水月の攻撃によって帰ってくると、ぼろぼろな

体で立ち上がろうとした……が。

「水球で包み込んでたから衝撃が和らいだはずなんだけどな」

水月の言葉を聞き終わると、女は気絶して地面に倒れた。

”勝者 月見里水月！”

そして水月はステージから降り、黒子達のところへ向かった。

「能力見せすぎちゃったかな」

「見せすぎですわ。最大の特徴のアレは使ってませんでしたけど、水流操作系能力者ってことがバレてしまってますわ」

そして黒子達はどんどん勝ち進んでいき、ついに観客のいる本戦へとたどり着いた。

そこには、今までの敵とは比べ物にならない実力者だけだった……。

果たして、黒子達は無事に勝ち進んでいけるのか！



## お祝い

「とりあえず本戦三人進出決定したね！」

水月がそう言くと、自動販売機からは『いちごおでん』が現れた。

「かんぱ〜い」

それぞれお互いの缶ジュースをぶつけ、本戦進出を祝った。

黒子は『うめ粥』を、花牟礼はザクロコーラはなむれを掲げて。

黒子達が缶に口をつけたその時だった。

”本戦を開始します。選手は集まってください”

「はや！」

「早すぎます〜」

「まだ一口ものんでいませんのに……。とりあえず空間移動テレポートしますわよ！」

## 第一回本戦

「どきどきします……」

「大丈夫だつて！ ほら！」

おどおどしている舞曲まいの背中を水月は押して、会場へと続く道に押し出した。

「はわわわわ」

「……………」

中々行かない舞曲まいにイラツ　ときた黒子は、空間移動テレポートで舞曲まいを会場へと転移させた。

「あ……あれ！？」

舞曲まいは何が起こったのか理解できてなかった。

” 第一回本戦　開始！ ”

「宜しく願います」

相手の声だった。透き通るようなきれいな声と同時に、冷たい声。見かけも冷たい感じの緑や青の色で外見が整えられており、顔つきも冷たくクールな感じだ。

「あつ、宜しく願います」

相手に釣られた舞曲まいも礼をした。

「では、行かせてもらいます」

そう言つて女は、左腕に手首から肩まで巻いている包帯をはずした。包帯が取られた場所には、黒いV字型の文様があらゆる方向を向いて彫られていた。

『あれも……能力……？』

疑問を抱いている舞曲まいに対して相手は即座に左腕を舞曲まいに向けた。そこからは黒いV字型の文様から、黒いツバメ程度の大きさのV字型で鳥のようなものが現れた。

## 危機

「飛べ」

合図とともにV字型の鳥は腕を滑りながら一瞬のうちに加速していき、やがてV字型の先端部分が舞曲まいに向かって飛んでいった。

「危ないっ」

あまりの速度に、頬をしかすめてしまった。

再び相手の腕からはV字型の鳥のようなものが4匹表れ、再び舞曲まいに向かって放たれた。

「くっ！」

避けれないと悟った舞曲まいは、背中に翼を生やして一気に上空へと舞い上がった。

「それがお前の能力か」

「どうでしょう？」

「随分と余裕があるようだな。ならばその余裕……我が力をもって無くしてやろう」

相手の腕からは再びV字の鳥が4匹現れた。

「飛べ！」

放たれた鳥は上空にいる舞曲まいの翼を貫いた。

「はやっ」

翼を貫かれて驚愕しながら落ちている舞曲まいに、容赦なく鳥が襲った。

## 羽鳥桜

”トトトトトトトトトトトトトトトトト”

猛スピードで連射される鳥は、舞曲まいの能力によって防がれた。

鳥によって起こされた煙が消えると、相手は驚いていた。

デユアルスキル  
「多重能力者！？」

今度は舞曲まいの手が盾と化したのだ。

「本戦だし教えてあげてもいいかな」

すると、突如舞曲まいの足元からは無数の細い蔓が現れ、どんどん舞曲まいに絡み付いていった。

やがて舞曲まいは『妖花』へと姿を変える。

「室内じゃないからこの姿じゃ戦いにくいけど……十分でしょ」

頭の部分と思われる花を除いて、全てのものが蔓で構築されている。腕と思われる細い蔓があつまった2本の太い蔓を相手に向かって振るった。

「植物を操ることができるのか」

冷静に分析しながら、相手は易々と鞭のように撓しなる2本の腕を避けた。

「こちらも本気で行かせていただこう」

そう言っ左腕を舞曲まいに向けた。

「こちら”も”って、私はまだまだ本気じゃないよ！」

「これも何かの縁だ、私の名前を覚えておけ。羽鳥桜はとり」

そう言っ腕の文様からは、V字の鳥が現れ、舞曲まいに向かって放たれた。

「ついでにこの鳥の名前も覚えておくといい。」黒羽くろはね”と言っ”

放たれた黒羽は、頭と思われる馬鹿でかい花に一直線に進んでいた

……が。

舞曲まいはそう易々と攻撃を受けるはずはなく、花からある液体を出した。

液体に触れた黒羽は”ジュー”という音を立てながら溶け、舞曲まいに触れるころには消えていた。

「なるほど、見かけだけではなく中身も化け物なのだな。だが次はどうだ？」

『！ あんなでかいのがきたら溶かすことも避けることも間に合わない！』

羽鳥はとりの腕には、とてつもなく大きな黒羽があった。

羽鳥はとりの体もはるかにしのぐ大きさだ。

「飛べ！」

大きな黒羽は舞曲まいの頭ではなく、蔓の体を狙っていた。

さらには、大きな黒羽をサポートするように後ろには通常サイズの

黒羽が数匹飛んでいた。

舞曲まいは必死に腕と蔓を操り、黒羽を止めようとするが、易々と貫かれていくばかりだった。

”そこまで！”

黒羽は決着がついたと判断した審判により防がれた。

”勝者 羽鳥桜はとり！”

## 第二回本戦

「相性が悪かったただけですの。あんまり凹むことはありませんわ」  
黒子が舞曲まいに、普通に近づいて普通にフォローした。

「うん……黒子がんばってね」

次に試合がある黒子に、応援のメッセージを託した。  
黒子はステージへと歩いていった。

” 第二回本戦 開始！ ”

『 先手必勝ですの！ 』

そう思った黒子は始まった瞬間に相手の後ろに空間移動し、ドロップキックを放った……が。

黒子が放ったドロップキックは女の頭をすり抜けた。

「 な！？ 」

即座に空間移動テレポートして相手から間合いをとった。

「 旭あさひ 琴音宜しくお願いします 」

『 な……随分と礼儀正しい人が多いことですね…… 』

「 白井黒子ですの。よろしくですの 」

黒子は挨拶を言い返すと、相手に向かって走っていった。  
「 そしてさようなら 」

## 幻

女はそう微笑むと、黒子の動きがとまった。

「審判さん、私は黒子さんに幻術をかけました。自力で解くことは不可能ですので、カウントを取っていただけますか？」

そういわれた審判は、言われたとおりにカウントを取った。

「勝者 旭 琴音！」

相手の琴音が幻術を解くと、黒子はハツとなり控え室へと戻っていく旭に蹴りを仕掛けた。

「黒子！」

黒子の目の前に水の盾が現れて蹴りが止められた。

「何故試合の邪魔をしますの！？」

「だから、勝敗はついたんだよ！」

知らないのも当たり前だ。黒子の知らないところで勝敗がついたのだから。

「え……？」

疑問を抱いている黒子に、琴音が助言をした。

「あなたが見ていたのは、私の幻術です。こちらの世界ではあなたの動きは止まり、カウントによって勝敗が決まったのです」

「そんな……」

「ほら黒子！ 戻るよ！」

水月は黒子の腕をつかんで、控え室まで引つ張っていった。

「仕方ないさ。幻術なんて能力じゃあ誰もかなうわけがないよ」

「あれが……超能力者第1位の力……」

どんよりとした空気の中、逃げるようにして水月はステージへと行った。

### 第三回本戦

” 第三回本戦 開始！ ”

『ここであたしが勝たなきゃ、どんよりとした空気のまんまだ！』  
そう思った水月は意気込み、腕を刀に変化させて相手に飛び掛っていった。

「めんどさいな〜」

そう言っ て相手の女は、指を一本動かした。

「ぐあっ！？」

突如水月の体が地面に落ちた。

「どうしたどうした！」

女はつつこんでいた右手を出した。やる気になったようだ。

「とりあえず繭にでもしとこうか」

そう言っ て女は、目にも留まらぬ速さで指と手、腕を動かした。

女の動きに呼応して、どんどん水月に糸が絡んでいった。

「このくらいでいいか」

そう言っ て動きを止めた女の指には蜘蛛のような糸があり、その糸の先には水月が包み込まれた繭があった。

「審判、はやく勝敗きめてよ。もう分かってるでしょ？」

” 勝者！ 光 みつしあん 紫遠！ ”

勝ち名乗りを受けた紫音は、糸を引いた。

引かれた糸は女の指のなかに吸収されたように見えた。

「化け物だらけですわね〜……」

黒子達は帰りぎわにいろいろと呟いていた。

「ほんとほんと。あの人達から見たら私たちなんてちっぽけな存在なんだろうなあ〜……」

「決めましたわ！ 私、これから修行をして三年後に開催される『超能力者順位決定戦』に出場しますの！」



### 第三回本戦（後書き）

今回でとある黒子の空間移動は終わりです。  
名を改めて再開いたしますので、そちらもどうか宜しく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0926m/>

---

とある黒子の空間移動

2010年10月9日18時24分発行